

退官に寄せて

中村保幸先生との10年間

下村 雅昭

この度、中村保幸先生が定年ご退職されることとなった。そのための特別寄稿を私にせよとのことであるが、本当にわたしでいいのだろうか、と思いながらPCに向かって。中村先生へのお礼をこめた文章を書けばいいのだろうか。それともただ褒めればいいのだろうか。それではまるで結婚式の挨拶と変わらないではないか。10年間も同じ学科で勤務したからには、白々しい内容を並べなくてもそれなりのエピソードがありそうなものである。最後くらい赤裸々に語ってもいいのではないか。だからこそ私が抜擢されたのではないか。いや最後だからこそ、感謝の意を込めた丁寧すぎるような送辞を書くべきではないのか。様々な思いが交錯する中、とにかく出会いの時から思い出してみることにする。

そもそも中村先生と私が「同僚」になること自体が実感沸かなかった。私は曲がりなりにも、京都大学医学部第三内科に長年お世話になっている者であるが、それ故「中村保幸」というビッグネームには恐れ多くて近づくのも憚れる状態であった。本学に生活福祉学科が出来ると決まった平成15年に、既存教員の一人として私も準備に関わったのであるが、まさかその中に中村先生が入られるとは思ひもしなかった。正式に本学科へお迎えすることになった時には、なるほど改組もやってみるものだと関心もした。顔合わせの会議の席で名刺を渡すときも、気の利いた言葉をあれこれ考えながら結局「どうもどうも」としか言えなかった自分を情けなく思った。それくらい緊張する存在だったのである。

中村先生の妻さを改めて思い知ったのは、学科紀要に毎年の研究業績を掲載し始めてからである。論文の数、掲載誌のIFの高さ、まさに度肝を抜かれたのである。当時私もそれなりに頑張って論文執筆を行っていたが、せいぜい国内誌に年間数報載せるのが精一杯であった。ところが中村先生は軽く30報を超えていたのだ。どこからそのエネルギーが生成されるのか、モチベーションが維持出来るのか、考えるほど気が遠くなった次第だ。ある日教授会で、博士論文の審査方法について議論がなされた時、あまりの形式張った体制に私も中村先生も意義を申したことがあった。しかしその際に、私は忘れも

しない一言を中村先生から聞くことができた。それは「こんな無駄なことをやっているから、論文数でアジア諸国に勝てないんだ」と力説されたことだった。なんと立脚点の異なることか。中村先生は日の丸を背負って論文を書いておられたのだ！まさに世界のNakamuraを肌で感じた瞬間だった。プロ意識、大学人としての責任、研究者のセンス、精一杯やることの意味等々、己の無能さを思い知ったのだ。研究室ではいつもPCのモニターに向かわれている印象だが、その先にはまさに世界が繋がっていた。

よくあるパターンかも知れないが、こういう優秀な人に限ってスポーツも得意である。天は二物を与えないのではなかったのか。中村先生といえばまずヨットであろう。お恥ずかしながら私はヨットに乗るという経験も知識も無く、ただの金持ちの道楽ぐらいにしか考えていなかった。しかし中村艇であるポストニアン号に誘っていただいた時に初めて、ヨットとは結構な身体運動を伴うスポーツであり、しかも中村先生がヨットレースにまで出場されていることを知った。あれだけの研究業績を上げながら、格好良すぎるではないか。これではまるで映画の中の何とか大将だ。私も負けじとゴルフに熱中したが、ゴルフは調べるほど身体に負担が大きすぎることを実感し、やがて手を引くこととなった。そんな私を尻目に、中村先生は自転車にも傾倒された。休日の様子は中村先生のFacebookに詳しいが、通勤にもフル装備での入れ込みようである。運動習慣の生活化である。いやスポーツマンとしてのライフスタイルである。いやいや卓越した認知特性としての健康オタクである(失礼)。まったくもってスキがない。

ならば学生からの人気はどうなのか。ここまでワーカホリックになると、いまどきの女子大生はさぞかし敬遠しているのではあろうって？それが違うのである。中村先生は女子大生から好かれる。悔しいが事実である。認めたくないが本当の話である。中村ゼミの賑わい様を見て欲しい。研究室のドアに飾られた似顔絵を見て欲しい。「私、学生から愛されています」と言っているようなものではないか。隣にある私の研究室の質素なドアと比べ

て欲しい。学生たちは中村先生に平気で「かわいい」などと言う。おいおい世界のナカムーラに向かってなんて失礼な！と私などはヒヤヒヤするのであるが、このへんがモテル男とそうでないのとの違いであろう。中村先生はいつでも「ウッフッフ！」と笑い飛ばすだけなのだ。

何だか結局は褒めているだけなのか。私のこの10年間は自己肯定感を下げるだけだったのか。今ではすっかり仲良くさせて頂いているが、実はお話をするときにはまだ少し緊張もするのだ。まだ怖いのである。でもこの歳になって気づいた、怖い先生が居るってことは大変幸せなことなのであると。追いつこうと思っても決して届

くことのない存在ってあるものだ。もうこうなったら私も大津の自宅から自転車通勤だ……いやいや冷静になろう。スモールステップで近づいていくしか無いのだ。私の定年まであと10年間、これまで以上に先生を追っていけばいいのだろう。何だか自転車で逃げる相手を徒歩で追いかけるような感覚だが。

中村先生、これでいいんですよね？

「ウッフッフ！」